

## Y10-25

### 徳島赤十字病院のホスピタリティーにもとづいたカフェの開設について

徳島赤十字病院 医療技術部 栄養課

○かやした あつこ栢下 淳子、岡田 克枝、富永 綱志、井上 和也、中西 悠二、中井 淑文、塩田 幸弘、中岡 睦

【はじめに】平成24年4月23日より病院内にホスピタルカフェ（仮称）が開店した。病院の栄養課が主体となって運営しているカフェで、一カ所に店舗を固定せず移動式（屋台形式）の形態で運営している。開店までの取り組みを報告する。

【目的】栄養課では、平成16年より定期的に入院患者やその家族・関係者を対象に無料でお茶会のサービスを実施していた。この取り組みは病院のホスピタリティーの一環として1回／2月の割合で展開していたが、好評のためより拡大したサービスが望まれていた。そこで平日に実費程度で利用できるカフェをオープンすることとなった。

【方法】徳島県に菓子製造業、飲食店営業（露店）の営業許可を申請。栄養課スタッフ（管理栄養士、調理師）が通常業務のシフトの中に組み込んで担当。主な営業場所は外来棟と入院棟のつなぎ目となる景観の良い場所。営業時間10時～16時。席数28席。料金は飲み物とフードのセットで500円、飲み物とフード各単品では300円とした。

【結果】開設当初1週目の売上金額は平均33,740円／日、5月の売上金額は平均41,489円／日、1日平均売り上げ件数106件であった。

【考察】カフェオープンから1ヶ月が経過するが、入院患者の癒しの時間、外来患者の待ち時間などに利用され始めている。今後は認知度を高め、多様性のあるカフェ活動を展開していきたい。

## Y10-27

### SCUにおける薬剤師業務の取り組み

諏訪赤十字病院 薬剤部

○まつばら松原ちはる、宮崎 雄紀、登内 盛治、跡部 治

【はじめに】脳卒中の患者では、内服自己管理が困難な例が多い。また持参薬使用もあって、内服薬管理業務がさらに煩雑化した。そこで、当院の脳神経外科・神経内科病棟では、病棟担当薬剤師と看護師とで毎日の『配薬準備』および『処方薬(内服薬のみ)確認』を実施してきた。薬剤師のその関わりは、2011年11月に本格始動した脳卒中ケアユニット（以下SCU）にも引き継ぎ、環境整備をはじめとし、新たな業務も加えて、SCUにおける薬剤師病棟活動として充実させてきた。今回、その経過を報告する。

【方法】『SCU与薬カート』をSCUの6床用に作成した。同じく新たに『SCU薬剤管理表』を作成し、薬剤管理指導を実施した患者では電カル上にこの表を添付可能とした。また、毎日の業務としては『配薬準備』『処方薬(内服薬・注射薬)確認』を実施している。

【結果】毎日の『配薬準備』『処方薬確認』により、使用期間に制限のある薬剤、腎機能・肝機能に注意する薬剤、内服薬と注射薬の重複処方などのチェック、持参薬数の確認やそれに代わる薬剤、より適した処方の提案などが早期に行えるようになった。さらに、それらの特記事項等を『SCU薬剤管理表』に残すことで、薬物療法の経過がわかりやすくなった。また、オリジナルの『SCU与薬カート』は安価で、一般病床と共通の引き出しが入るものとなり、看護師にも好評である。

【考察・課題】『SCU薬剤管理表』は、記載欄が項目ごとに分かれていないため、活用しにくい。今後、わかりやすいものに改訂し、他のスタッフと共用できるようにしたい。さらに『配薬準備』『処方薬確認』を含めた今回の取り組みを、「薬剤管理指導1」の充実、「病棟薬剤業務実施加算」へと繋げたい。

## Y10-26

### グラム染色評価を導入した感染症患者における薬剤管理指導

前橋赤十字病院 薬剤部<sup>1)</sup>、検査部<sup>2)</sup>、

心臓血管内科 (ICD)<sup>3)</sup>

○まるおか ひろのぶ丸岡 博信<sup>1)</sup>、矢島 秀明<sup>1)</sup>、小林 敦<sup>1)</sup>、前島 和俊<sup>1)</sup>、吉田 勝一<sup>2)</sup>、横澤 郁代<sup>2)</sup>、金子 心学<sup>2)</sup>、丹下 正一<sup>3)</sup>

【はじめに】感染症患者における薬剤管理指導では抗菌薬の薬学的評価が必要と考える。既にTDMやPK/PD理論からの投与設計は日常的に行ってきた。しかし、感染フォーカスと培養結果や薬剤感受性試験を加味して、薬剤師が抗菌薬の選択や変更について提案することの難しさを感じていた。昨年の本学会で、「直接介入に伴う抗菌薬の適正使用推進の成果」にてカルバペネム系抗菌薬の使用量の減少について報告できたが、マンパワー不足から継続的な取り組みは困難であった。そこで、有用なツールであったグラム染色評価を薬剤管理指導に導入することで同効果が期待できると考えた。

【目的】抗菌薬の適正使用を目的に、起因菌の推定と消失確認をグラム染色評価で行い、抗菌薬の効果判定と処方提案の材にすることを目的とした。

【方法】医師からの依頼や病棟薬剤師が疑義を感じた際に、医師の了承をえて検体のグラム染色評価を行い、処方提案の一助とした。グラム染色は検査技師から指導を受けた薬剤師自らが必要な時に行うこととした。

【結果】薬剤師自らがグラム染色評価を行うことで、抗菌薬の疑義対応や効果判定に必要な情報をタイムリーかつ迅速に収集し、えられた情報から多くのケースで処方提案が受け入れられた。起因菌の減少・消失を確認することで、選択した抗菌薬に誤りが無いことに確信がえられたことは大きな安心になった。

【考察】薬学的な観点から適切な時期にグラム染色評価を実施することで、抗菌薬の不適切な選択や不要な変更・投与を減らすことが可能と思われる。簡便で短時間に結果がえられるグラム染色評価は有用であり、薬剤師自らが実施することで、より迅速性を持った臨床対応が可能になると思われる。

## Y10-28

### 精神科病棟での薬剤業務拡大に向けての取り組み

諏訪赤十字病院 薬剤部

○たにくち じゅんこ谷口 純子、矢嶋 直子、登内 盛治、跡部 治

＜目的＞2012年度診療報酬改定に伴い、病棟薬剤業務実施加算が算定できるようになった。算定にあたり、薬剤師が病棟において医療従事者の負担軽減及び薬物療法の質の向上に資する病棟薬剤業務を実施することが必要とされる。当院精神科病棟（1病棟）で現在行われている薬剤師の業務は主に服薬指導であり、服薬指導以外のことにはあまり介入してこなかった。今日、新たに病棟薬剤業務を行うにあたり病棟看護師へのアンケート調査を行った。その結果をもとに、今後の病棟薬剤業務で何を実施すればよいかについて検討したので報告する。

＜方法＞2012年5月に精神科病棟に勤務している看護師21名に対して、（1）病棟において薬剤師が行うべきと考えられる業務、（2）薬剤師に今後希望する業務、（3）薬剤指導の介入時期、等についてアンケート調査を実施した。

＜結果＞（1）服薬指導50％、薬剤管理30％であった。（2）服薬指導のフィードバックが70％と最も多かった。また、薬剤管理は処方された薬30％、定数薬50％となり定数薬管理希望が多かった。少数ではあるが、カンファレンス参加との回答もあった。（3）様々な意見があり、急性期を過ぎた早期介入の希望が最も多く50％、退院に近い時期は25％となった。

＜考察＞薬剤師による薬剤管理は新規業務となるため看護師の考え方に差がみられ、少数ではあるが、処方された薬の処理時間を理由に消極的な意見もあった。しかし、薬剤管理は薬剤師として処方確認ができること、看護師の負担軽減になると考えられるため、調整を図りながらできるだけ係りたいと考える。また、薬剤師は服薬指導を充実させスタッフにフィードバックを行うことが最も必要であり、カンファレンスなど情報共有も大切と考える。今後はスタッフと共に薬剤師としての職能が生かせる業務を拡大させていきたい。